

原初的知覚世界と関係発達の基盤

小林隆児

二〇数年前のある出会い

最後の講演になりました。小林です。お疲れでございました。先ほどの西さん、滝川さんの話はとても理性的な話でしたけれども、私の話は、感性に訴えるようなものになるのではと思います。

「原初的知覚世界と関係発達の基盤」という難しい感じのするテーマです。これは佐藤幹夫さんが私に下さったテーマでありまして、今日の話の流れからすると、とてもいいかなと思うのです。私は今日、日頃の自分の臨床での、あるいは色々な現場の人から教えてもらった、あるいは感じ取った、そういう経験を分かりやすくお話ししながら、皆さまの日頃の経験と照らし合わせてもらいながら、考えていっていただければいいなと思います。極力難しい理屈っぽい話はしないように心がけようと思っております。

このテーマの話をしようにとしますと、どうしても私が二十数

年前に体験したお話をしなければいけないわけですが、私の話をお聞きになったり、あるいは本を読んでくださったりした方は、またその話かと思われるかもしれませんが。さっと流します。私が大分にいた二〇数年前、温泉とフグ三昧で毎日過ごしていた時期に出会ったある高校生の女の子です。今でいう高機能広汎性発達障碍です。その子は小さいころからとても漢字が好きだったんだけれども、なぜか中学・高校あたりから「九州電力」というポスターの文字が気に入って、大事に持ち歩いていたのです。

高校生になって春が来たわけです。異性に対する憧れですね。ところが異性に対する憧れが、直接誰かを「素敵だわ」というかたちには、なかなかなりにくいのです。そうしますと彼女は、自分の空想のなかにいる素敵な誰々さんというのを、絵に描いてくれたのです。そのときに描いたのがこれだったので（図1）。とてもきれいな絵なんですけど、私がびっくりしたの

は、なぜこの顔なのかということですね。なぜこの首から上の「九」という文字と「州」という文字、彼女に言わせれば「九州」君なのか。彼女はまじめな顔をして言うわけですね。「九」君と「州」君だと。私は最初のうちは冗談かなと思ったのですが、彼女があまりにも真剣に「九君はね、何々でね」などと言うのです。これはただごとじゃないなと思ったのです。なぜ漢字がこういう対象になるのか。

何度も会っているうちに、この「九」という文字と「州」という文字を、彼女は新聞や雑誌などで見ると目にするわけですね。そうしますと、色んな文字の形によって表情があるということ（図2）が、彼女の話から分かってきました。つまり私たちが「あの人笑っている」「あの人怒っている」と感じるように、それと同じ感覚で、漢字がキャッチされているということ

図1：「九」君と「州」君

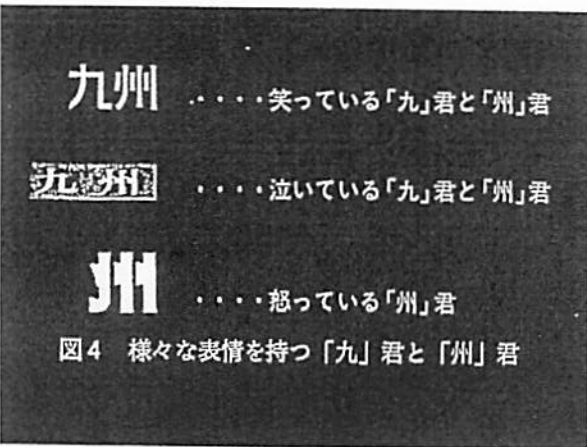


図2：様々な表情をもつ「九」君と「州」君

のようなのです。

彼女の自宅の近くを目豊本線が走っていました。つい先日、寝台特急「富士号」のお別れのセレモニーがあったそうですが、その寝台特急「富士号」が西鹿兒島から東京まで延々と十何時間走るわけですけど、これをたいへん気に入っていたのです。この富士号そのものが生き生きと、もう「富士君」という感じで捉えるのです(図3)。(こゝまでは良かったのですが、その

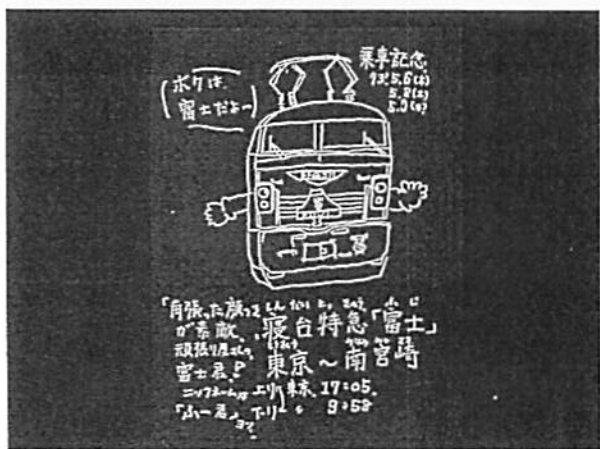


図3：寝台特急「富士号」

あとが私には驚きだったのです。

彼女は高校を卒業したあと、無事、障害者をたくさん雇っている会社に就職できて、二年目を迎えました。そのときに新人が入ってきた。その新人はちよつと厚かましいといひましようか、落ち着きの無い人で、彼女の持ち場を荒らすようになったのです。彼女は不安を起こし、混乱状態になったのです。それですぐに彼女と会って、治療を再開したのですね。そのときに



図4：私を横目で見ている「富士」の「土」

彼女はこの富士号の「富士」という文字を厚紙に張って、私のところへ持ってきたのです。そしてこんなことを言ったのです。「職場から帰るとき、他人から見られているような気がする」、「私を横目で見ている感じ」、「この「富士」と同じような感じだ」というのですね。「富士」のこの「土」という文字は明朝体ですと、上の横棒の右端に三角のかたちがありますね。これが彼女には「横目で私をじろつとにらんでいるように感じます」と言うわけです(図4)。私はそれを聴いて、こゝまでいくんだ、と思ったのです。

先ほどから話していることを総合すると、彼女の知覚世界外界がどういふふうを感じ取られているのかということいろいろ想像させてくれる、とても貴重な体験だったと今更ながらに思うのです。

「もの」と「ひと」が貼りついて受けとめられている

この経験がそれ以後の私の臨床においてずっとベースにあり、色々な人の話を聴いてきたのですけどね。その中で同じようなことを色々な人が言っているし、また色々な人が経験しているなかに、同じようなことがちりばめられている。それがすごく分かってきたのですね。そのことを具体的にいくつもお話します。

私は自閉症年長者入所施設にしばらく関係していて、職員がこんなことを教えてくれたのです。私にはそれがとても勉強になったんですが、そこには強度行動障害といわれる人がたくさんいるわけですよ。その最も激しいなかの上から三番目くらい

の人ですが、ものすごくこだわりが強いわけです。そしてすぐ奇声を上げます。そばで不用意な構えしていると、突然襲われたり、色々と激しい行動が起こります。大変なのですが、職員の人があるときこんな光景を見たと言っています。

誰かがドアを開け、そのままにしていたのですね。「彼はただドアをもと通りに自分で閉めるだけではなく、ドアを開けた人を連れてきて閉めさせるのです」と言っています。

もう一つ面白い話を聞かせてくれたのですが、その施設では夕食の後、お風呂に入ってから着替えて、最後にコンサートのようなことをやり、その終わりにおやつが配られるのですね。そのときに職員がおやつを一人ひとりに渡すのです。だいたい、みなさん喜んで受け取ります。ところが、なぜか彼は受け取らないといふのです。欲しくないのかなと思えますよね。でも、たまたまそのおやつが一つ下に落ちていた。そしたら、落ちていたおやつを自分でとって食べたといふのです。

この話を聞いて、皆さんは何を考えますか。私はなるほどと思っただけです。彼にとつては、単にドアではない、単におやつでもないのです。ドアに、それを開けた人が貼り付いていて、ドアだけを取り出すといふふうにはならないのですね。おやつも「おやつだ、美味しそう」ではないのです。配る人がそのおやつに貼り付いて彼らに飛び込んでくる。だから受け取らないのです。彼はその時、周りのあらゆる人に対して非常に警戒的で、ピリピリしていたのです。だからそういう想い、つまり疑心暗鬼といひますか、もつと深刻な心理状態にあるときに、お

やつは「美味しいね」ではないのですね。疑心暗鬼な心理とおやつがくつついたかたちで、彼には飛び込んでくる。そうすると、彼はそれを受け取って食べることができない。

話を聴いたときには不思議だと思いますが、よく考えてみると私たちでも、知らない人から「坊やお菓子あげるよ」と言われたら、喜んで受け取りますか。いまの親はそういう教育はしませんね。「ありがとう、と言ってもらいなさい」とは言いませぬ。「絶対に、知らないおじさんからももらったらだめよ！」そういう教育をしますね。私たちがやはり怪しい人と、もろう食べ物をご自分でつなげて考えることを、ある状況に置かれたら必ずやるわけです。毒味とはそういうことですね。それが非常に先鋭なかたちで、自閉症の人やある状況に陥った人に現われている。そういうエピソードです。これは彼らの知覚体験の世界を考えると、大変示唆的なことではないかと思うのです。

意味の把握と形の認知

失語症の研究で有名なゴールドシュタインという人が、脳損傷の患者さんにあるテストをしたときに、こういう反応をしたという非常に面白い話があります。図形を提示して、その患者さんに模写してもらおうテストです。どうということのない四角の図形ですけれど、模写しようと思うとできないのです。しかし四角の図形を四つ重ね合わせてつなげた図形になると、すらすらと描けるというのです。

て捉えたわけではないですね。こういうことは日常的に、私たちの生活のなかにも起こっているのです。

私の名前「小林」の「林」だけをとった左側の大きい林と小さい林を見てください(図5)。別には大林と小林だ、なんてしゃべっているわけではないのですが、その漢字を見て、左側と右側を比べると、あるいはじつと見ていると、大きい「林」と小さい「林」がある、という認識の世界とは別に、この大きな「林」が、手前に接近してくるような動きを感じる。あるいはこの小さな「林」が遠ざかっているような動きを感じる。あるいは右側の大きな「林」は力強い感じがする。左側は弱々しいとか。意味として林という漢字を把握する世界とは別に、いま申し上げたような感じが起こってくるのです。

ずいぶん前でですけどこのスライドをある講演会で示して、フロアの方にどんなふうに見えますかって尋ねたら、当時は和歌山の「カレー毒殺事件」というのがありまして、「右側は、林真須美」だ、左側は「林健治」だ、なんていう、変な冗談を言った人がいたんですね。どこか言い当てていて面白かったなとそのときにはウケたんですが、古い話ですからやはり今日はウケませんね(笑)。

それはともかく私たちは意味を把握するとともに、力強いとか弱々しいというような、生き物であるかのように感じ取る側面、あるいは近づいていく、遠ざかっていく、そういう動きも感じる、そういうところがあるわけです。

これは昨年出した本にも書いていますが、私が以前いた

そこで、その人に聞いたのですね、「四角形の図形を指してこれは何ですか?」分らない。答えられないのです。でもこのつなげた図形になると、「窓」と答えたと言います。つまりその人にとって、具体的な日常の中で普段目になっているものとして、あるいは身近なものとして理解できたときにはなんの抵抗も無くそれをキャッチでき、模写することができたというのです。ところが単に四角という形だけを取り出した図形になってしまおうと、模写することができない。非常に面白い反応です。そのことを、ゴールドシュタインが本に書いています。これも、先ほどお話したことと似た反応だろうと思うのです。つまり図形を日常の、関心あるものをつなぎ合わせる。そうすると、あの形の認知がすんなりできる。そういうことなのでしょうね。私たちは日常生活のなかで、こういう体験をいろいろしているのです。

もう三年近く前の話です。当時話題になったのが、早稲田実業高校の投手、斉藤祐樹君がもっているハンカチでした。延長再試合、田中マー君と祐樹君との熱投で甲子園が沸きましたけれども、翌日からデパートのハンカチ売り場で、この手のハンカチが飛ぶように売れたという、ホントかしらというような話があります。なぜ青いハンカチが飛ぶように売れたのか。

普段ならただの青いハンカチということになってしまおうのでしょうか、斉藤祐樹君が凛々しい姿で熱投し、その姿に感動し、そういう想いがハンカチに貼りついて捉えられているわけです。その時の夢中になった人たちは、たんなるハンカチとし



図5：大きい「林」と小さい「林」

大学の学部のゼミでこの原初的知覚の話をしたところ、「先生、こういう例はそれに該当するんでしょうか?」と言って、次のような話をしてくれたのです。

親戚に甥がいて、生後七ヶ月で、お母さんと一緒にその子はバギーカーに乗って、買い物か散歩に出かけたのです。横断歩道の前にさしかかったので止まり、信号が青になるのを待っていた。すると、バスが通ってきたわけです。そして信号が青

になった。バスから見れば信号が赤になったので、バスが止まったわけですよ。最近では珍しい運転手さんでしょうね。窓から乗り出して、その赤ちゃんに向かって、ニコツとしながら手を振ったといえます。最近いませんね、そういう運転手さんはその子はとても喜んだわけですよ。そして思わず誘われるように手を上げたのでしょうか。よほど嬉しかったのでしょうかね。

そうしたら数日経って、また外に出かけていった。バスはたたくさん走っています。するとその子はバスが通るたびに、バスに向かっています。小さいながら手上げるといいます。これはよく分かりますね。小さい子どもだからいいわけで、私たちがやったらちよつとおかしいんじゃないかと思われるでしょうけれど。子どものときに、特に幼いときには、そういう知覚体験世界があるんだという、すごく分かるような気がします。

以上、色々な例をお話ししましたが、おそらくすべてにわたって独特な知覚体験世界があることを教えられます。それはおそらくすべて「原初的知覚」と言っているような、独特な知覚体験のあり方だろうと思うわけです。

「原初的知覚体験」の特徴について

原初的知覚体験がどのような特徴をもつか列挙してみます。この種の知覚体験は、一つには、ちよつと同じ振動数の音叉を並べて一方を振動させると、他方も共振するという性質をもつ知覚体験です。身体の動きや気持ちの動きと分かちがたい知覚体験で、それも非常に大事な点であると私は思っています。

徴を示しているのではないかと思えます。

他人の痛みがおのれの痛みになる。親、なかでも母親にはそういうところがあるとよく言われます。自閉症の人がそばで誰かがパニックを起こしているのに出会うと、本人も同じような状態になるとか、伝染してしまうとか、そういうことがよくあります。これはやはり「Aさんがパニックになっている」と醒めた目で捉えることができない。他人の混乱や不安が、おのれの不安となつて共振し、おのれも混乱してしまう。自分と他者というような、認識する世界がしつかりとできていない人の場合は、よく起こりやすい。これは原初的知覚と言われる体験世界の大きな特徴であるうと思えます。

先ほどから例を示しましたけれども、さまざまな対象刺激があります。それが一見すると、音刺激、視覚刺激、味覚刺激、嗅覚刺激などであるようにみえても、どんな刺激であっても、そこにある共通したものを感知取る。そういった独特な性質が原初的知覚にはある。コンサート会場へ行くと、若い女の子が何とも言えない声を出しますが、ああいう声を「黄色い声」と言いますね。あるいは「甘い香り」という言葉もありますし、誰々さんの話し方が非常に「棘々しい」とも言います。

そういうふうにして私たちも、日ごろ何気なく表現しているその体験様式をよく見ると、黄色色という視覚、色彩刺激と、声という聴覚刺激であるにもかかわらず、そこに共通したあるものを感じ取っているがゆえに「黄色い声」と表現するわけです。どんな刺激であっても、そこに共通したある動きを感じ取って

からだ心地良い状態、揺さぶられるような非常に気持ち良い状態です。そういう状態であれば、心地良い情動がどんどん高まっていきます。そういうときにはおそらく、周りの世界、飛び込んでくる世界というのは、非常に心地良いものでしょう。

しかし、不安に苛まれ、孤立した状況に置かれ、体が固まってしまうような状態。そういうふうになっていきますと、非常に不安な状態であり、同時に外界の世界も非常に恐ろしい形相で飛び込んでくるようになります。そういう特徴がこの種の知覚体験世界にはあるだろうと思うのです。

ですから、身体の動きと知覚と情動が渾然一体となつて、そういうかたちで体験されるという特徴があるだろうと思うのです。通常、私は私、あなたはあなた、自分と他人、というようにはつきりと区別して考えて行動していますけれど、こういう体験世界では自分なのか他人なのか、自己と他者という区別がはつきりせず、そういう区別がつかないある種の一体感が起こるのだろうと思えます。

昔、私は学生時代に尺八の楽器演奏をやっていたものですが、よく合奏をやっていたのです。合奏の体験というのは本当に面白いですね。自分ひとりで演奏していると、下手のためもあつてどうもあまり感動しない。しかし、誰かと一緒に合奏して、そこにハーモニーが奏でられると、全体に何ともいえない雰囲気や場が生まれて、自分が演奏しているのか誰が演奏しているのか区別がつかないような、一種独特な感覚に襲われます。ああいう世界が、まさに原初的知覚といわれるものの一つの特徴があるだろうと思えますし、大きな意味を持つと思えます。

どういふことかと申しますと、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚というふうな、通常言われる五感と私たちが表現している分化した知覚・感覚の世界とは違つた、非常に未分化な知覚体験世界である。言葉を換えて言いますと、非常に本能的なものだろうという気がするわけです。

そういう知覚体験世界が、もし私たちに働かなくなつたらどうなるだろうか。あの青いハンカチを見ても、何ら欲しいと思わないでしようし、「黄色い声」といつてもまったくピンとこなくなるでしょう。その最たるものが離人症という病気でみられます。木村敏という人が「あいだ論」を提起したとき、最初のアイデアとして沸いたのが離人症の患者さんの訴えであつたといえます。時間体験が、離人症の患者さんにおいて、「いま何時何分」「一分過ぎた」、そういうことを頭では理解できる。しかし、「今日の講演会はずいぶん疲れた」とか、「ちよつと飽きたやつた」とか、「いやあ、今日の誰々さんの話は面白かつたから、あつという間に終わつちやつたな」とか、そういう時間体験が、すぼつとなくなるわけです。

私たちは時間を「生きた時間」として体験している。その体験は、いま申し上げたような原初的知覚といえるものが働いているがゆえに、おそらくは可能なだろうと思うのです。それを木村敏は「アクチュアリテイ」と言ったのです。「アクチュアリテイ」というのは、先ほど西さんが「ありあり感」とおっ

しゃったのですが、それに近いものだろうと思うのです。その瞬間瞬間を感じていることなのでしょうね。(アクチュアリテイ)とはその瞬間瞬間のことを言うわけですよね。

ですから私たちが生きていくという実感というものを心の底から体験するときは、そこにこの(アクチュアリテイ)を体感しているのだらうと思います。でも私たちは、一介の医者、あるいは臨床家、対人援助職の人などの立場で、援助される側の人に相対するときに、とりわけ医者の場合には相手を患者さんという対象として捉えて、どんな症状があるかと、分析的な目で捉えようとするのが習慣化しています。

しかし実際のひとりひとりの患者さんは常に生きています。その生きている様をどう捉えるかというところに、(アクチュアリテイ)が関係してくるわけです。そういうものを生々しく感じ取れるのは、この原初の知覚が働くからなのです。ですから、ここで私たちが体験することがいかに大切なことかということ、後半話そうかと思っているわけです。

「自」と「他」が一体となった世界

いままで申し上げたことは、これまでも色々な学者や研究者が色々な言葉で、色々な角度から取り上げています。これから私がお話しすることは、いままで申し上げた原初の知覚体験のありようが実際の臨床現場で、どういうかたちで(患者—治療者)、あるいは(クライエント—援助者)という関係のなかで現れ、それが関係を難しくするか、あるいは関係を劇的に好転

立したというのでしょうか、そういう世界から出発するのではなくて、人間というものは、最初は自己と他者という区別のない自他が一体になった世界から出発している。それが原初の知覚そのものの性質を示しているし、まさに人間というのは、言いかえればカタカナの「ヒト」から漢字の「人」へ成ってゆくプロセスは、最初は養育者との一体感をベースとした濃密な養育が行われることによって次第に子どもらしさが生まれ、「自分ボク、わたし」と自己主張をするようになっていく。そういうようにして、徐々に自己と他者というのが浮き上がってくるものなのですね。

ですから最初は、(自—他)、あるいは自己と他者が一体になったような体験世界から出発するのでしょう。そうしたときに、私たちが子どもや発達に様々な問題を持っている人、いろいろなかたちで援助する場合には、最初はとにかく一体になるような、そういう体験世界を志向する必要があるだろうと思えます。それを可能にするのが今日のテーマの原初の知覚です。

他者のこのころのありようは、私たち自身の身体を通してしか感じ取ることができない。関係を抜きにしては、彼らの体験世界を理解することはできない、ということを示しているわけです。だから関係発達臨床、関係というものはそういうものであることを私は主張しているのです。おのれの存在を抜きにして他者理解、あるいは他者援助ということはありません。私はそういうスタンスで臨床に関与しているのです。

醒めた目で、私は治療者であり、黒子である。誰々さんは障

させることにつながっていくのかということですね。

人間関係の基盤を支えているもの、原初の、つまり本能的な、これ以上は深く入っていけない根本の体験様式を原初の知覚体験と言っているわけですが、それをベースにして臨床を考えていくと、色々なものが見えてくることを、私はこの二〇年間、経験のなかで日に日にそのような想いを強くしています。

私たちは患者さんを理解するときに、どうしても「Aさんは……」というように個に焦点を当てて見ます。個としてのその人の世界。でもこの世界ではいろいろな人との関係が働き、そして生きています。そのことを実際には取り上げているのですが、ほとんどの場合、Aさんと他の人との実際の関係のありようのなかでどういう意味があるのかという点については、実際に取り出して検討してみるというスタンスが、これまでの臨床のなかでは乏しかったのではないかと思うのです。

私が関係発達とか関係発達臨床によって目を開かされたのですが、それはけっして従来から言われているような、子どもとお母さんとの関係がだんだん深まっていく、あるいは子ども同士の関係がどんどん広がっていく、というように一般的に言われる対人関係そのものを客観的に見て、どういう対人関係が出来上がっていくものなのか、発達段階として捉える。そしてこの段階からこの段階に育っていくためには、どういう療育プログラムが必要か。そんなこととして、私は関係発達臨床というものを捉えているのではないのです。

では何かと申しますと、自己と他者というような、個別に独得者で、病者である。そして何々という症状がある。診断はこうだ。だから治療や療育はこういうプログラムでやりましょう。そういう話とはまったく性質を異にすることなのです。ですから発達障害に対する援助でも、発達障害でない人の治療でも、考え方は同じです。

このころの臨床で私たちが関わる人たちは、発達の様々な遅れや歪みを抱えておられるわけです。そのような人たちは初期の段階の人間関係で躓いている人たちですね。人間の発達というのは、初期の段階の、原初的な段階での発達の基盤がきちんと出来上がって、そこに積み重なるように次の体験、そしてまた次の体験というように、ひとつひとつの体験が積み重ねられて、本来の発達は進んでいくはずなのです。しかし、私たちが現場でどう援助したらよいか非常に苦労しているのは、その一番原初的な段階での関係作りや発達支援が上手くいっていない人たちなのです。

そうしたときに治療や援助のありようを考える際、原初的な知覚のありようをよく理解することによって、援助の一番基本的なところの何が大切かということ志向しながら取り組んでゆくと、いろいろな示唆を受けることができるのではないだろうかと思うのです。

母親は子どもとどこでずれてしまっただろうか

関係がうまくいかない人たちはたくさんいるわけですが、どこでどんなふうに躓いているのか。現実の世界でどんなふうな

ズレやねじれがあるのだろうか。それは様々な形で現れているわけですが、わかりやすい例を示してみたいと思います。

こういうオモチャ(パンチングドール、起き上がり小法師の類)(図6)があつて、一歳八ヶ月の子がいるわけです。じーっと眺めていますね。するとお母さんはこのオモチャを手で押さえ、ポンと弾こうとしたのです。これはトイザラスで「パ



図6：玩具「パンチング・ドール」

ンチングドール」という商品名で売っていますが、そしたらこの子が「ウーッ！」と怒ったのです。そばにスタッフが寄つていき、「わぁー○○ちゃん、コレねえ、そうかぁ、コレいいねえ」と言った。

彼はこのパンチングドールの或る部分をじつと見入っていたわけです。そこにはマークや文字が書いてあった。彼はそこに熱中していた。お母さんは、「これはパンチングドールだ」ということで、「このオモチャはこういうふうにして遊ぶんだよ」と子どもを遊ばせようとしたわけです。これはひとつのズレですね。よろしいですか。お母さんと子どもに、あるズレが生じているんです。

次は一歳の子です。滑り台の下のほうから、一生懸命這い上がろうとしています。ところが足が滑ってしまつて、うまく登れない。お母さんが見ているかわいそうに思つたのでしょう。抱えて上に乗せてあげて、それで上から滑らせてやったのです。すると彼は滑り終わったあと、頭をゴチンと打ちつけて、「ウェーン！」と泣き叫んだのです。この子は下から一生懸命に這いあがろうとしている。夢中になっているわけです。お母さんは「このオモチャは滑り台だよ」、「滑り台は、こうやって上からパッと滑つたら気持ちいいよ！」と思ひ、この子にそうしてやったわけです。これでは遊びが親子のあいだで盛り上がっていかないのです。だから子どもは頭を床にゴチンと打ちつけたのです。

次の例。特別なオモチャでもなんでもなくヘリコプターなん

さんだめですよ、それでは」と言つても仕方がないのです。誰でもある条件下にあるとこうなってしまうのです。

関係づくりにとって大事なこと

ここから面白いところですが、どう関わっていけば関係が変わっていくのか。いくつか例を申し上げます。

昔、私は福岡に長くいたのですが、学生時代に情緒障害学級という自閉症の子どもたちがたくさん通う、今言う特別支援学級ですが、そこで初代の担任をしてもらった先生が校長になつて講演をされた。その講演を聴いて感動したのです。その先生はこんなことをおっしゃつたのです。

三〇年ほど昔のことです。福岡で大洪水があつたのです。当時福岡市が貯水ダムとして大きく依存していたダムは江川ダムというダムだったので。この江川ダム周辺に雨があまり降らないため、貯水能力がとても低かつたのです。いま江川の話にしても全然ウケないでしょうから止めておきますが、少しだけ言うと、江川ダムというダムの名前と、当時、阪神から強引に巨人に入った江川投手が重なつて、江川が大嫌いになつた人が私も含めて何人かいます。それだけの話なのですが、大洪水になつて、以後節水意識が、福岡市民のあいだでものすごく高まつたのです。その頃の話です。

校庭と教室のあいだに、外に出て汚れた手足を洗う水道がありますね。そこにホースをくつつけて、一日中、水をまいていく子どもがいたのです。もちろん自閉症のお子さんですね。教

ですが、それがある子どもが手にとつて「ブーン」と言つて飛ばし、意気揚々としていたのです。何度も「ブーン、ヒコウキー！」と言つていたわけです。自閉症の子ですけれどね。真面目なお母さんだったので、傍で一生懸命付き合いながら、「何々ちゃん、それ飛行機じゃないよ、ヘリコプターだよ」と言っている。それから先、子どもは背を向けて逃げてしまつたのです。

分かりやすい例を三つ挙げましたが、何が共通しているかは皆さんもお分かりでしょう。子どもが夢中になっている知覚体験世界がどういふものか、想像してみます。そこには原初の形の知覚体験が、とても思ついているわけです。

マークとか文字が「九」君「州」君と似たように映つていたかもしれません。滑り台を下から上の方に、一生懸命上ろうとしている時の体感。あるいは、自分も一緒に飛行機と飛んでいる。思わず「ヒコウキー！」と言うわけです。「これはなんている名前前の物かしら」というような目で見ていくわけではないのですから。こういうときの親は、子どもがどういう想いでどういふ世界を生きているのか、何を楽しんでいるのか、その何が面白いのか、ほとんど分からないのです。自閉症に関するさまざまな本を読んだり、色々な人の講演を聴いて、試行錯誤しながら一生懸命に関わつておられる。頭の中がとても忙しい状態です。そういう中で少しでも子どもに言葉をかけ、刺激を与え、教えてあげる。一つでも言葉が増えるように指導する。そういうお母さんですから、こうなつてしまふのです。それを、「お母

師としてはたまりません。「水の無駄遣いだ!」と、周りからは冷やかな眼で見られたと思います。「好きなようにやらせて何をしとるのか!ちゃんと止めさせないか!」。そういう周りの圧力を感じながら、先生は付き合っていたのだらうと思うのです。そういう禁止させようとする目でその子を見ないで、しばらく付き合っていたと言うのです。子どもがこうやって水をまいているときに、先生もやっていたわけですから、そこに虹が出たのです。思わずその先生が、「おお、キレイやねえ!」と言った。そのひとことで、その子との関係が劇的に変わったと言いました。僕はそれ冗談じゃないだろうと思いました。これが一つです。

次は、幼稚園に通っている男の子です。四歳。紐と輪(わ)を使って、集団で紐通し遊びをやっていたのでしよう。その子はしっかりやっていたのです。それをお母さんがそばで見守っていました。どんな想いで遊んでいるかお母さんが気を留め、耳を澄ませていたら、「スーパーパー」と言っていたのです。「スーパーパー」というのはご存知ですか。ご存じないと思います。わたしも全然知りませんでした。ある人に聞きました。消防自動車の特長なタイプで、池や川の水を引き、消火活動にあたる。そういうことができる特殊な長いホースと、強力なポンプが搭載されている。そういう消防車です。その長いホースを使っていたのでしよう。その坊やが通した糸、彼にとってはホースを用いていたのが「スーパーパー」だったのです。

自分を弁護しているような、そんな感じの構え方、お話の仕方なのです。お子さんのことが心配で、子どもはこうなんですという子どものスタンスではないのです。

それには理由があったのです。ある就学相談会で、自分は心配して行ったのに軽くあしらわれてしまい、カチンとこられたんですね。それで、もう頼るものか、私がんばらなければという、そういう思いですごく気を張ってこられたのです。ですから、人さまから指差されたりするようなことは、子どもにはさせまいと思って、子どもの一挙手一投足に注意する。それが細かいのです。息が詰まるような感じですよ。三〇分以上そういう話です。

一時間で勝負です。どうしようかと思ったのですが、私は一時間で勝負するのだったら聞いておけばいいけれども、その時に別に意図的ではないのですが、感じたままを申し上げたのです。お母さん、本当にこれまで大変で、色んな心配があるのでしょうか、ということ申し上げた上で、「お母さんのお話をお聞きしていると、遊びの無いハンドルで、ずっと運転してこられたような感じがしますね」というふうに言ったのです。そうしたらお母さんは、突然目頭が熱くなって、ちよつと言葉が途絶えたのです。

そばでお子さんが遊んでいたのです。遊んではいたんですが、お母さんの話が気になってしょうがないのです。一見楽しそうに遊んでいるんだけど、一緒に遊んでいる学生に言わせると、こちらにずっと聞き耳を立て、気になってしょうがない状態だ

糸通し遊びが終わりました。担任の先生が「さあ、もうおしまい。糸を返してください」と言うと、子どもたちは返すわけですね。ところがその子は、無視するかのように返さないのです。そのときのお母さんの機転が良かったと思います。その子に向かつて「何々ちゃん、スーパーパーを返してください」と言ったのです。そうしたら、すつと返したのだそうです。これもなかなか感動的な話として聞きました。さっきの水の話と相通じませんか。

人様の話ばかりしているので、ごく最近の私の話をします。ちよつと一回だけ見てほしいと頼まれ、一回勝負で拝見したのです。関係がしつくりこないというケースですね。皆さん方が、高機能広汎性発達障碍だな、とすぐ診断つきたくなる誘惑に駆られるタイプの六歳の男のお子さんです。視線が合いくい、コミュニケーションがしつくりこない。お母さんはいろいろと質問したいわけです。

それでお母さんと一対一というよりも、そばでお子さんと先生さんが遊び、私はお母さんと対面で話を聞いていたのです。するとそのお母さんの話は、ものすごく細かいのです。そつが無いというか、知的な方ですね。そして熱が入っていくわけです。するとだんだんお母さんの目が大きくなって、身を乗り出して話をされるわけです。私が話と話のあいだに入る余地が無いのです。

そんなことを感じながらお聞きしていたのですが、お母さんはお子さんの話をして下さってはいらぬのだけれども、何となくつたと言うのです。するとその子が、ボールを一見するとはずみでやったように思えるのですが、ボールとこちらの方に投げてきたのです。テーブルの上にはお茶がありましたから、こぼれそうになり、お母さんが注意するわけです。

これは明らかにね、アテンション・ブリーズ(注意喚起)の行動です。それで私はふざけて受けたのです。そして子どもがママのそばに寄ってきたのです。そしてまわりつき出したのです。このときはそれで終わったのですが、私はこの経験に非常に手ごたえを感じたのです。少ししてからまた同じようなケースを経験したのです。どうも、似たようなことが起こる。

あともう一つ取り上げようと思っているのは、昨年、原田理歩さんという人と一緒に本を書いて出したのです(『自閉症とこころの臨床』岩崎学術出版社)。原田理歩さんは自閉症の施設の職員で一〇年間ほど経験した人ですが、この人の臨床センスが抜群なのです。

その原田さんがこういうことを教えてくれたのです。非常に激しい行動障碍。こだわりは強い、興奮すると殴る蹴るの自傷他害。大変な方でした。興奮すると、訳の分からないことを、うわあつと爆発的に言うのです。原田さんは、最初、何が何だか訳が分からなかったと言うのです。でも、どんなときにそのセリフが出るか、観察したというのです。そして色々なことが分かってきた。

冷凍食品でサツマイモに胡麻をふりかけたお菓子があるのですが、「胡麻おさつ」と言うそうです。それでその人がすこく

不安になったときに言うセリフの中に「ゴマオサツ、シマツトイデー」と言つて絶叫するわけです。最初は「ゴマオサツってなに？」などと尋ねていたら彼に何度もやられたそうです。彼のせりふの意味がなかなか分からないのです。そこで、お母さんから話を聞いたり、これまでの生活の様子を観察したりしながら謎解きをするわけです。すると、次のようなことが分かったというのです。

彼が高校時代に、学校に行けない時期があったのです。そのときに学校の先生が、毎朝迎えに来てくれたのです。彼は行きたくないわけです。何とも言えないそういうときの雰囲気や想いがあるわけです。それに何とかケリをつけるために彼が何をしたかと言うと、冷凍の胡麻おさつをレンジに入れてチンして、それを食べ、何とか気分を整えて、それで登校したというのです。不登校のときに学校の先生が迎えに来てくれる、その何とも言えない気持ち。どうも彼はそのときと同じような気持ちになつたときに、「ゴマオサツ、シマツトイデー」と言っているようだ。そう原田さんは気づいたと言っているのです。

それまでは「ゴマオサツってなに？」と、そんなことを言おうものなら、彼はますます興奮していたのです。ところがそれが分かってからは、原田さんは「あ、胡麻おさつね。嫌だったよね」と答えられるようになった。つまり、「ゴマオサツ、シマツトイデー」というセリフを発するときの、彼の想いが分かるようになってきた。彼の「ゴマオサツ」という言葉を使うけれど、同時にそのときの彼の気持ちを感じ取って「嫌だったよ

コニコ笑いながら答えました。この人なんか、一体何が効いたのかわからないし、何もなくても二〇年以上付き合っているところのかもしれない」。

「妄想が取れるのをお餅が網から取れるような感じがするというのは、これはすくなくmetaphorですね。metaphorメタファー・隠喩ですね。暗喩、たくまざる比喩的表現です。これが分かるひとは精神科の医師としてうまくなる、と私は思うね」。これは精神科の医師に限らず臨床心理士でも対人援助に従事している方すべてに共通する話だと思つて、ご紹介するのです。

精神療法、こころの臨床ですね。「精神療法もうまくなる。metaphorは因果関係じゃないんです。identificationと関係がある。metaphorによつて事柄を理解するんですね。たとえば、精神的な治療の場合、転移ということをよく聞くでしょう。たとえば子どものときに親との関係の中で起きたことが、長じて、たとえば医者に対して同じことが転移として出てくるという。これはmetaphorなんです。論理構造がmetaphorなんです。ですから、metaphor的な捉え方ができるようになれば、間違ひなく、いい精神科の医者になれると思う。…大体、以上で私が一生かけてやってきたことを要約したことになるのではないかと思います。「こころいうふう」に、この講演を結ばれたんです。

私はこの本のなかで、とりわけこの第二章が一番気に入ったのです。土居健郎氏の言っていることが、私にはよく分かるのです。今日お話ししたことこの土居氏の話は、ものすくすくつながらのですね。関係が変わるときの例でもお話ししました。「お

ね、腹立ったよね」と言つて返してあげると、すとんと納得して落ち着くようになったと言っているのです。

この話は、いままで話したものと共通していると思うのですよ。こういうところが彼らとの関係作りの一番大切な部分を示唆しているような気がするのです。

巧まざるメタファーを理解することと臨床の力

最後に、最近私が読んでとても良かった本を、ここまでの話とつなげて、少し紹介します。一〜二ヶ月前に岩崎学術出版社から、土居健郎氏の『臨床精神医学の方法』という本が出ました。この四〜五年間に行われた講演などを活字にし、本にしたものです。その第一二章は東京で講演され、それが『臨床精神医学』という雑誌に載り、この本に転載されたわけです。自分は今までの精神科医としての長い人生の中で何を追求してきたか、おのれの精神科医としての歩みのエッセンスをお話されたのです。その最後にこういう言葉があったのです。

二十数年間、ずっと妄想を言い続けていた現在初老期の女性の患者さんの例を取り上げていました。「最近患者がガラツと変わつて」——土居氏は女性の妄想のことを「勘繰り」と言われたのですが——「勘繰りをしなくなつたんです。そして、『先生、もうあんまり考えなくなりました』といつて、妄想を訴えなくなつたんです。それで、一体どういう心境の変化かと聞いたところ、患者が笑いながら、『お餅が焼く網にくっつくでしょ。そのくっついてる網から餅がはなれたような気持ちです』と二

母さん、遊びの無いハンドルで一生懸命、車を運転してこられたみたい」。これはmetaphorですね。お母さんのこれまでの想い、そして現在の想いを、そういうかたちで取り上げると、お母さんの深い想いに届いたわけです。

つまりmetaphorには、喩えられるものと喩えるものの両者があるわけですが、それをつないでいるものが何かということなのです。妄想が取れたときの感じ。餅が網にくっついて、でもそれがすぽと取れたときのあの感じ。同じだというわけです。この感覚というのは、まきれもなく原初的知覚です。ですから、知覚体験世界というものを、私たちは日頃から臨床のなかで、患者さんとクライエント、あるいはクライエントと私たちという関係のなかで、どういうふうにかような感じが起るのかを、常にモニターしながら臨床に携わつていく。その重要性を土居さんのmetaphorの話は示しているのだらうと思つたのです。

転移関係。先ほどの、お母さんと子どもとの関係のなかに立ち現れているもの。お母さんと私との面接場面で立ち上がったいるもの。同じものが立ち上がったのです。それを私はmetaphor的な表現でお母さんに投げかけた。それが響いたわけでしょうね。色々なことが連想として浮かび上がってくる、非常に含蓄のある言葉です。

最後にぜひ申し上げたかったことは、この原初的知覚というもの、我々にとつて非常に大きな意味があるのは、土居さんが言っているように「甘え」と深い関係があるからなのです。

「甘え」という情動の動きですね。「甘え」という心地よい感情

を示していますが、同時に相手に対して結びつこうとするこころの動きでもあるわけです。それがまさに原初的知覚で捉えられているわけです。

自分の中にそのような心の動きが起こったことをしっかりとモニターし、反省的に捉えていかないと人の心の動きは分かりません。そういうことをやっていると、今この人は私に対して、なんか近づきたいような近づきたくないような、アンビバレンスが強まっているとか、あるいは肩の力が抜けて急にわあーっとこちらに近づいて来ている。あるいは私が語りかけたら、身構えてしまつて遠くに行つてしまつた。そういう心の動きがすぐ感じ取れるのです。それがその人の、現在の他者に対する構えの一つの基本形を作っている。

原初的知覚をつねにモニタリングしていると、それが感じ取れるようになるような気がするのです。だから臨床のコツといつていいと思うのですが、この原初的知覚というものを十分に自分の中で吟味し、体験の中で振り返つて、臨床の場ではこういうことを言うんだ、といろいろと考えて参考にしていただければ、臨床がいままでとは違った形で面白くなるのではないかと思います。私自身の経験ではそうなのです。おがましい言い方ですが、最後にそんなお話をこれで終わりたいと思います。ご静聴ありがとうございました。



●西研対談集
【佐藤幹夫の編著より】

哲学は何の役に立つのか

考えることは知識をひけらかすことではない。「生きる技術」を得る工夫である。

洋泉社・新書V 740円＋税

●滝川一廣インタビュ集

「こころ」はどこで壊れるか(三刷)

精神科医はほんとうに「心の専門家」なのか？

洋泉社・新書V 680円＋税

「こころ」はだれが壊すのか(二刷)

いきり立つ正義ではなく、「ふとこころ」の深い思考を！

洋泉社・新書V 720円＋税

●村瀬学インタビュ集

次の時代のための吉本隆明の読み方

本書は、くどすためだけの批評からも、党派的思考からも、最も遠い吉本論である。

洋泉社 2200円＋税

●橋爪大三郎インタビュ集

永遠の吉本隆明

吉本は間違えたのか？ いや間違えなかったし、裏切らなかった。

洋泉社・新書V 720円＋税